七月三十日。

ほぼ全国的に梅雨（つゆ）も明け、暑さは益々（ますます）厳しくなり、いよいよ本格的に夏到来といった時期である。

学生は夏休みが始まり、それは俺――橘（たちばな）アサトも例外じゃない。

部活？　受験勉強？

そんなものは知らない。

高校三年生だが、知った事じゃない。

去年の夏も高三だったような気がしないでもないが、深く考えてはいけないと、俺の中の魂（ゴースト）的な何かが囁（ささや）くので考えない。

とにかく――部活も受験も考えなくていい夏休みの学生など、暇人以外の何者でもない。

よく、『退屈で死んじゃう』といった表現が冗談で使われるが――実は正しい。

退屈は確かに人を殺す。何の刺激もなく、ただただ同じ事を繰り返すだけの日々は、確実に心を殺していく。

明言する――退屈で人は死ねる。

だからこそ、人は刺激を求める。

面白い事、楽しい事、もしくは変化を望む。

それはダメ人間の俺でも例外じゃない。

死に方くらいは選びたい。

少なくとも、退屈で死ぬのはご免だ。

8戦目

『夏と浴衣とあざとい子猫』

エアコンの効いた室内で、たっぷりのミルクとシロップで濁りきったアイスコーヒーをストローで啜る。美味い。冷たい甘味が脳を活性化させてくれて、今ならどんな難事件でも解決出来そうな気がしてしまう。いや、まあ、解決しないけど。難事件なんて起きないし、起きても関わらないのが俺の主義であり信条だから。これはただ、目の前の状況を見て見ぬふりをするための、一種の現実逃避の思考にすぎない。

「ベアにゃーん！　世界一可愛いよ！」

「えへへ。ありがとにゃん☆」

親戚であり、我が家の同居人でもあるベアトリーチェが、何処ぞのアイドルのような扱いを受けている。

いや、むしろメイド喫茶のシステムに近いのかもしれない。来店数や注文によってポイントが溜まり、客はポイント数に応じたサービスを『看板娘』から受けられるらしい。

そう。此処はよく判らない『管理人』が趣味でやっている店――看板には『局地戦・改』とあった――で、ベアトリーチェを始めとする五人の少女達が『看板娘』をやっている。一応は店の体裁をとっており、客が来れば店員が応対して、軽食やドリンクを提供する、喫茶店に近い。

当然だが、いかがわしい店ではない。念のため。

「……ベアトリーチェは大人気だな」

「それはもう。愛想が良いですし、やはりロリっ娘は強いですよ」

と、無表情に答えたのはアイスコーヒーを運んでくれたタオエンだ。同居人である流遠三姉妹の次女、つまりベアトリーチェの姉である。

「ヤミヒメは人気ないのか？」

「姉さんはガードが固いですし、美人ですから、最初から誰もが諦めてしまうんです」

長女・ヤミヒメは所謂、高嶺の花だと思われているらしい。

とはいえ、やはり猛者もいるらしく、ヤミヒメとテーブルに着き、一対一で何かを話している者がいた。ずいぶんと楽しそうだ。

「あの彼は、姉さんと話を合わせるためにヒーロー番組を観ているうちに、すっかりハマってしまったそうです」

件の猛者は鼻息荒い感じでテーブルに食玩――明らかに玩具がメインのお菓子付きのアレ――と思われるロボットを広げているが、それを見つめるヤミヒメも同様に鼻息が荒い。あれはたしか現在放送中の『九人の究極の救世主が宇宙を救う』やつだ。

なお、『テーブルで会話』というのもポイントサービスにあるらしい。

「た、タオエンさん！　お願いします……！」

不意に、耳を疑う言葉が聞こえた。

「……ご指名だぞ」

「意外そうですね」

俺の内心を読んだように、タオエンがジトっとした目を向ける。普段からジト目がちではあるが、普段の三割増しくらいでジトっとしている。

「まあ、正直」

別にタオエンを不細工だと思っている訳ではない。むしろ姉と妹に劣らぬ美少女だと思う。思うのだが……いかんせん、完全に玄人向けというか、少なくとも素人にはオススメ出来ない属性が満載なのだ。

無口。無表情。毒舌。更に百合っ娘。

まず普通の男では攻略不可能。性転換して美少女になって出直して来るしかない。

「彼はどうしようもないドMのド変態で、月に一度は罵倒されないと死んでしまう病に侵されているそうです。いっそ死んだ方が世の中のためとも思うのですが、それでも命には違いないので、仕方なく救済措置として、生きる価値のないクソ虫にも慈悲の心で接してさしあげている次第です死ねばいいのに」

「はひぃぃぃッ！？　あ、ありがとうございます！」

「大声を出さないでください不快です。他のお客様にご迷惑だと判らないのですかこの豚野郎。這いつくばって地面とキスでもすればいいのに」

「ぶひぃぃぃぃぃッ！？」

立て板に水で罵詈雑言を垂れ流すタオエンの背中を見送りつつ、どんなものにも需要があるんだなと知ってちょっと大人になった気分。判ってる。これも現実逃避。

現実逃避ついでに、メニュー表の横にあるポイントサービス一覧を眺める。必要ポイント数が少ないものから、『握手』『料理をあ～んしてもらえる』『テーブルでおしゃべり』『ツーショット撮影』など、様々なサービスがある。

そして、今日と明日は『暑中見舞いキャンペーン』らしく、通常の三分の一のポイントでサービスが受けられるらしい。しかも期間中は『看板娘』達の衣装が浴衣という普段とは違う衣装だからか、ベアトリーチェはツーショット撮影で大忙しだ。

ヤミヒメとタオエンは……やはりキャラ的に頼みづらいのだろう。サービスなので断られる事はないのだろうが、少しでも嫌そうな態度を取られたら立ち直れない。男心は脆く繊細で傷付きやすいのだ。

その点、ベアトリーチェは愛想が良いし、幼い容姿と天真爛漫な性格からいって、そういった怖さがない。タオエンの言っていた『ロリっ娘は強い』とは、そういう意味もある

のだろう。

情けないとか言うな。男心は――（以下略）。

「……」

次々とツーショット撮影を終え、客と二言三言交わし、笑顔で送り出していくベアトリーチェを眺めていると、本当にアイドルの握手会のように見えてくる。

どうでもいいが、インスタントカメラ――チェキだったか――のシャッターを押して、客に写真をその場で渡している仮面の男が『管理人』だろうか。十年くらい前の『仮面のヒーロー』のマスクをしているが、明らかに不審者だ。

「――おにーいちゃん！」

「うお！？」

不意に至近距離から声をかけられ、妙な声を上げてしまった。

『うお』？　お魚！？　わたし、お寿司食べたい！」

「……近い近い近い」

眼前にまで迫った猫のような少女の額に掌を当て、やんわりと適切な距離まで押し返す。

中一だが、小学生と言われても通用する小柄な体躯。髪は茶色のショートヘア。黄玉を思わせる大きな黄色の瞳。

先ほどまで撮影で大忙しだったベアトリーチェだ。

「やーん。お兄ちゃんってば、強引」

悪戯っぽい表情を浮かべ、口先だけの文句を言う。本気で言っている訳ではないし、こういうのが男心をくすぐると判っている。ベアトリーチェは小悪魔キャラなのだ。

「……仕事はいいのか？」

俺はそれを知っている。だから焦らず、慌てず、『お兄ちゃん』らしい対応をする。本当の妹は別にいるが、今はそれはどうでもいい。

「あのね、わたし、これから休憩なんだ」

ベアトリーチェはベアトリーチェで、俺が動じなくてもお構いなしだ。この辺りは単純に無邪気なのだろう。やはり子供である。

「一緒にお祭り会場、見に行こうよ」

「祭りは夕方からだから、屋台はまだだぞ？　設営中かもしれん」

今日と明日は近所で夏祭りがある――此処の『暑中見舞いキャンペーン』もそれに合わせたらしい――が、前述の通り開始は夕方からで、今は午後三時を過ぎたばかりだ。

「それがいいの！　あの、『これから始まるぞ』っていう雰囲気が好きなの！　だから、ね

え？」

甘えるような声音で、上目遣いで、すりすりと身を寄せてくる小悪魔が一匹。俺は周囲から射殺さんばかりの視線に晒され、おとなしくベアトリーチェと一緒に店を出た。

●
●
●

「早く！　こっちこっち！」

店を出て少し歩くと、最初の角を曲がるなり走らされ、猫が通るような路地を進み、気付けば神社の裏側にたどり着いていた。

静かだ。人の気配はなく、練習中なのか、祭囃子が遠くに聞こえる。

「此処、良いでしょ？　わたしのお気に入りスポットなんだよ」

えへへ――と、俺の方を振り返り、自慢げに笑うベアトリーチェ。その際、動きに合わせてオレンジ色の浴衣の裾がふわりと舞った。浴衣には清楚なイメージがあるせいか、普段の明るく元気なベアトリーチェとのギャップが際立つ。

本人は何も変わっていないはずなのに、妙にしおらしく見えてしまう。

「ああ。そうだな」

「うん！」

同意を得られた事が嬉しいのか、ベアトリーチェは屈託のない笑顔を浮かべる。

確かに良い場所だ。周囲と切り離されたようで、完全に断絶した訳でもなく、かろうじて繋がっている、そんな絶妙な場所だと思う。

「そろそろ戻ろっか」

遠くに聞こえていた祭囃子の演奏が終わると、ベアトリーチェが言った。

「ん？　もういいのか？」

「うん。もう充分」

まだ店を出て十分ほどしか経っていない。これから歩いて戻っても、五分とかからないだろう。休憩にしては短いが、ベアトリーチェの言葉に嘘はないと、表情を見れば判る。

浴衣の裾が風に舞うように、また揺れる。その動きには、つい視線で追ってしまう効果でもあるのか、目が吸い寄せられてしまう。

ふとベアトリーチェがニヨニヨと笑みを浮かべているのに気付き、はっとした。

俺は恐らく、無意識にベアトリーチェの浴衣姿に見惚れていたのだと思う。それを確認する術はなく、他の誰にも目撃されていないのが救いだが、彼女の表情を見る限り間違いないだろう。

……不覚だ。

「お兄ちゃん、浴衣（ゆかた）、好きなんだね」

「……」

「それとも――わたしの浴衣姿が好きなのかなぁ？」

「……」

「うんうん。そっかそっか！」

俺の無言の抵抗虚（むな）しく、目の前の小悪魔はすべてを見透かしているようで、「えへへ」とはにかむように微笑んだ。

普段から割りとそうだが、今日は余計にベアトリーチェに頭が上がりそうにない。

Mission complete

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『そーりょくせんっ！』八戦目をお届け致します。

『そーりょくせんっ！』になって二度目の夏です。時間がループしております。『サザエさん』方式なので、そこんとこ夜露死苦（よろしく）！

ちなみに、アバンの魂云々（ゴーストうんぬん）は『攻殻機動隊』ネタです。実写は結局、観ませんでしたが。

今年も暑中見舞いで、担当も同じくベアトリーチェです。ローテーション的にはヤミヒメなのですが、ベアトリーチェの浴衣（ゆかた）が描きたかったのと、夏のイメージがある娘なので。

ショートストーリーですが、上手い事、ベアトリーチェの小悪魔っぽさが出せたのではないかと、ちょっと悦（えつ）に入っています。いや、思いのほか短くオチまで書けたので。

ロリっ娘だけどロリっ娘らしからぬ一面がある――そんな背徳感こそがロリっ娘の魅力ではないでしょうか？

まあ、ストレートなのも好きだけど！　アニメ『天使の３Ｐ！』絶賛放送中！

それでは、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

現実（リアル）で夏らしい事なんて何もなくても、素晴らしい萌えが仮想現実（バーチャル）にはあるじゃないか！

あ、ちなみに今回出番がなかったツバキとカナコは、翌日の担当という設定です。是非、ポイントを溜めて、推（お）し看板娘のサービスをお楽しみください。

……そういう企画もいいな。

２０１７／７／24　流遠亜沙

アンケートに答える
『そーりょくせんっ！』ページに戻る